研修Ⅱ　平成26年度　香小研大会に向けての研究提案

自ら考えを表現し、ともに豊かに学び合う国語科学習指導の創造
－言語活動の充実を図る学習指導をとおして－

多度津町立多度津小学校

1　仮説

意欲を高める学習課題を設定し，自分の思いや考えを表現する言語活動を学習過程に効果的に位置付けるとともに，教材に向かうために板書や発問・助言を工夫することで，子どもたちは豊かに学び合い，思考力・判断力・表現力が育まれるであろう。

2　研究の視点及び内容

（1）視点１　培う力を明確にする教材研究

①　培う力を明らかにするための手順の明確化

②　意欲を高め，継続して追求する適切な学習課題の設定と提示の工夫

③　言語活動を通して培う力が育っているかを見極める評価の在り方

（2）視点２　自らの考えを友だちとかかわらせる学習指導の工夫

①　「典型の学習」から読みの「型」を学び，自らの学びへと向かう指導の工夫

②　考えを深め，人とのかかわりを深める板書構造の工夫

③　教材にかかわらせる発問，考え方の方向を示す助言の工夫

（3）視点３　言語活動を充実させるための学習指導の工夫

①　適切な言語活動の選定

②　言語活動と教材を効果的に関連付ける単元展開，学習指導過程の構想

③　相互評価を通して言語活動への見通しをもたせ，充実を図る工夫

（4）視点４　国語科学習を補充する基盤づくり

①　読みへの意欲を高める交流活動

②　学校図書館，町立明徳図書館の活用

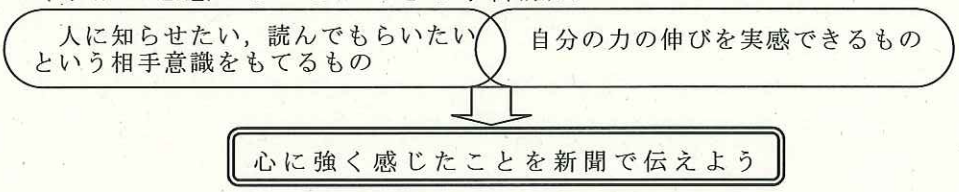
③　家庭読書の充実と啓発

3　実践内容

物語が強く語りかけてきたことを考えながら読もう　－6年「ばらの谷」

（1）視点１　培う力を明確にする教材研究

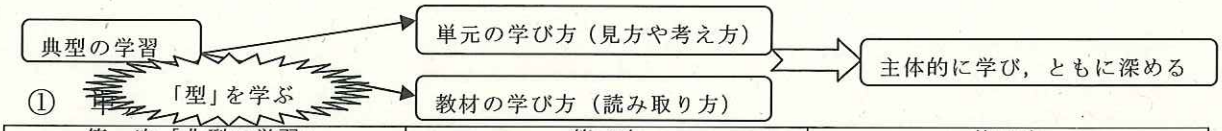
①　やりがいを感じることができる学習課題



②　言語活動を通して培う力が育っているかを見極める評価

	評価B	評価A
事例1	山場での登場人物の心情や行動等大きな変化から，感じたことや考えたことを自分の言葉で新聞にまとめている。	山場での登場人物の心情や行動等の大きな変化から感じたことや考えたことを自分の経験と結びつけながら，自分の言葉で新聞にまとめている。
事例2	読み取ったことを自分の言葉でまとめ，構成を考えながら新聞に書き表している。	作品からのメッセージを読み取り，読み取ったことを自分の経験とつないで構成を整えながら書き表している。

（２）視点２　自らの考えを友だちとかかわらせる学習指導の工夫



①

第一次「典型の学習」	第二次	第三次
山場での変化に目を付けると，作者の伝えたかったことを読み取れることを学ぶ。「かさこじぞう」「であえてほんとうによかった」	「ばらの谷」を読み，作者が伝えたかったことを読み取る。	「桃花片」を読み，作者が伝えたかったことを読み取る。 山場の変化を見付けながら他の物語文を読む。
単元を貫く言語活動「〇〇新聞づくり」のポイントと関連した指導 「山場の大きな変化を見つける」「強く心に残る言葉を挙げる」「考えたことや感じたことをまとめる」		

②　教材の学び方＜授業前半部分を「典型の学習」とした指導＞6年「ばらの谷」

（東京書籍）

第二次（第２時）			
授業前半（典型の学習）	授業後半		
ピンク色のばら	白色のばら	黄色のばら	青色のばら ピンク色のばら
村人、ドラガンの心情を読み取る学び方	→	→	→

教材の学び方＜45分の学習を「典型の学習」とした指導＞2年「虫は道具をもっている」

（東京書籍）

第二次		
第１時（典型の学習）	第２時	
人間と虫を比較した書きぶりを「カミキリムシ」から読み取る。	授業前半 第１次を生かし，「ケラ」を読み取る。	授業後半 自力で「カマキリ」「チョウ」を読み取る。

③　構造的にまとめた板書

・　登場人物の考えや思いが明確になるよう，上・下に区切ってまとめた板書

④　教材にかかわらせる発問，考え方の方向を示す助言

・　指導案に「発問・助言」「児童の反応」「高まった児童の反応」を明記

・　「ドラガンは何をしてきたのだろう。」←振り返る発問・助言

・　「どんなことから，そう思ったの。」　←考えの根拠を示す助言

（３）視点３　言語活動を充実させるための学習指導の工夫

①　優れた叙述について自分の考えを表現することのできる言語活動

→「心に強く感じたことを新聞で伝えよう」

新聞のよさ…身近で考えやすい。記事毎に分けて書ける。見出しを工夫できる。

②　言語活動と教材を効果的に関連付ける学習指導過程

第一次	第二次	第三次
「かさこじぞう」「であえてほんとうによかった」など，山場で大きな変化が分かりやすい本を使い，メッセージを読み取る学習をする。	第一次で学んだ学習を生かしながら「ばらの谷」で大きな変化からメッセージを見つけ，自分の考えをまとめて表現する学習を行う。	身に付けた力を生かして「桃花片」で自分の考えをまとめて表現する活動を行う。
単元を通して，様々な教材を読むことで，大きな変化を見付け，メッセージを読み取り，それに対しての自分の考えをまとめるという読みの力を高めていく。		

③　友だちと学び合う相互評価

・　心に残った言葉が同じ友だち同士が集まって互いに考えを述べ合い，アドバイスをし合う場の設定

（４）視点４　国語科学習を補充する基盤づくり

①　読みへの意欲を高める交流活動

・　物語「ばらの谷」の大きな変化からのメッセージや「桃花片」の読みから自分が感じたことや考えたことをまとめた新聞の掲示

②「調べ学習ゾーン」と「つどいゾーン」の活用

③「家庭読書」への協力の呼びかけ

平成２５年度香小研国語部会夏季研修会資料

自ら考えを表現し、ともに豊かに学び合う国語科学習指導の創造
ー言語活動の充実を図る学習指導をとおしてー

平成２５年７月２６日（金）

多度津町立多度津小学校

研究発表会予定：平成２６年１１月７日（金）

平成25年度　多度津小学校研究構想図

子ども像
なかまとともに伸びる、
心やさしい多小っ子

学校教育目標
自ら学び、なかまとともに、たくましく生きる子どもの育成

－「かかわり」をとおして、自分を見つめ、人を見つめ、社会を見つめる　－

研究主題
自ら考えを表現し、ともに豊かに学び合う国語科学習指導の創造
－言語活動の充実を図る学習指導をとおして－

視点１　培う力を明確にする教材研究
視点２　自らの考えを友だちとかかわらせる学習指導の工夫
視点３　言語活動を充実させるための学習指導の工夫
視点４　国語科学習を補充する基盤づくり

視点１

1　培う力を明らかにするための手順の明確化
2　意欲を高め、継続して追求する適切な学習課題の設定と提示の工夫
3　言語活動を通して培う力が育っているかを見極める評価の在り方

視点２

1　「典型の学習」から読みの「型」を学び、自らの学びへと向かう指導の工夫
2　考えを深め、人とのかかわりを深める板書構造の工夫
3　教材にかかわらせる発問、考え方の方向を示す助言の工夫

視点３

1　適切な言語活動の選定
2　言語活動と教材を効果的に関連付ける単元展開、学習指導過程の構想
3　相互評価を通して言語活動への見通しをもたせ、充実を図る工夫

視点４

1　読みへの意欲を高める交流活動
2　学校図書館、町立明徳会図書館の活用
3　家庭読書の充実と啓発

1　研究主題

自ら考えを表現し、ともに豊かに学び合う国語科学習指導の創造
－　言語活動の充実を図る学習指導をとおして　－

2　主題設定の理由

「知識基盤社会」においては、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視し自らが学び続けていく「生きる力」を育むことがますます重要になってくる。新学習指導要領においては、「各教科等の指導に当たっては，児童の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語活動の充実が必要である」と示されており、学校教育での言語活動の充実が指摘されている。

本校の全国学力学習状況調査や県学習状況調査の結果をみると、思考力・判断力・表現力に課題があることが明らかになっている。また、国語科の学習が必要と考えている児童の割合が他教科に比べて低いことや、国語科の学習が日常に生かされていないことも明らかになった。

このような背景を踏まえ、本校の子どもたちに「生きる力」を育むために「言語活動」を重視した研究を進めることとした。特に、学習指導においては、学び合いを深め、比較や関係付けの思考を促す「板書構造の工夫」や、教材内容に児童を向かわせ考えさせる「発問・助言の工夫」を重点に指導を進めてきており、これらは、今の研究にも結びつくものと考えている。

3 研究主題について

「自ら考えを表現する」の、「自らの考え」とは教材にかかわり、児童が感じたり考えたりしたことである。「自ら考えを表現する」とは、子どもたちが意欲をもって学習問題の解決に取り組む過程で、友だち同士で考えを深めるために「自らの考え」を相手に正しく伝えようと書いたり話したりすることである。

「ともに豊かに学び合う」での「ともに」とは、人とのかかわりを通して学びを深めたり、人とともに学ぼうとする態度を育んだりしていくことである。「豊かに学び合う」とは、自分や人が創りあげた感じ方や考え方を関係付けたり意味づけたりすることで、さらに感じ方や考え方を広げたり深めたりする学習の姿である。

このような学習のためには、教材からどのような力を育んでいけばよいのかの教材の考え方や、教材における場面の様子や登場人物の心情の変化に着目させる教師の発問・助言、さらには、場面や心情の変化を視覚化して、比較できる板書の工夫等の指導力を高めていくことが重要と考える。

4　仮説

意欲を高める学習課題を設定し、自分の思いや考えを表現する言語活動を学習過程に効果的に位置づけるとともに、教材に向かうために板書や発問・助言を工夫することで、子どもたちは豊かに学び合い、思考力・判断力・表現力が育まれるであろう。

５　研究の視点及び内容

視点１　培う力を明確にする教材研究

１　培う力を明らかにするための手順の明確化

本単元で培う力を見極めるためには、学習指導要領に基づいて年間指導計画を作成して指導事項を明確化する必要がある。作成においては、学習指導要領と教材を照らし合わせ、培う力が螺旋的・継続的に育つよう偏りや欠落に留意している。

また、前後の学年でどのような力を培っているのかの系統を調べ指導案に明記することで、児童の実態や指導の重点内容が明らかになり、学習指導での発問や助言のあり方、板書構造等の改善につないでいる。

２　意欲を高め、継続して追求する適切な学習課題の設定と提示の工夫

言語活動が子どもにとって意義あるものとなるために、人に知らせたい、読んでもらいたいという相手意識を持てるものや、活動の過程において自分の力の伸びを実感できるものへと向かい、やりがいを感じることができる学習課題を設定する。

単元の展開中においては、見通しを持たせたり、言語活動の意義の自覚を高めたり、児童相互の評価から意欲を高めたりする等の指導を行う。

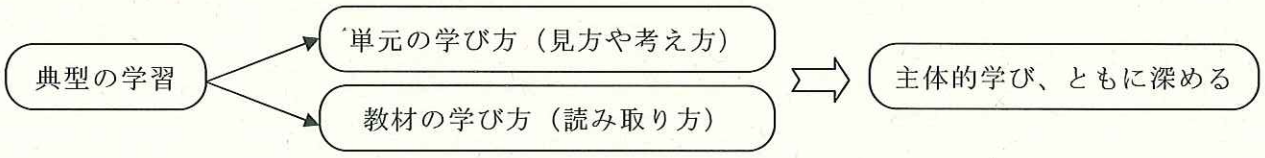
３　言語活動を通して培う力が育っているかを見極める評価の在り方

培う力が育まれているのかの評価を行い、学習指導過程を組み直したり、新たな視点を気付かせるための発問や助言を工夫をしたりするなど、今後の学習指導の改善に生かしていく。単元のどこで、どんな方法で、どんな観点の評価を行えば、指導法の改善となるのかを明らかにする。

視点２　自らの考えを友だちとかかわらせる学習指導の工夫

１　「典型の学習」から読みの「型」を学び、自らの学びへと向かう指導の工夫

「典型の学習」とは単元の見方や考え方や教材にかかわる方法の「典型」を学習することである。「典型の学習」を生かして児童一人一人は、教材に向かい、読み取りから感じたことや考えたことを、友だちの見方や感じ方と比較し、「ともに」学びを深める学習指導方法を築くことを目指している。



２　考えを深め、人とのかかわりを深める板書構造の工夫

板書は「ともに」学ぶための道具である。ここには、「典型の学習」に関わる内容や教材の見方や考え方、表現の特徴、さらには、友だちの考え方や感じ方が構造的にまとめられていることが「ともに学び合う」ために不可欠である。学び合い深めるために比較や関係付けの思考を助けたり促したりする板書構造を「型」として取り組んでいる。

３　教材にかかわらせる発問、考え方の方向を示す助言の工夫

見方や考え方を高めていく学習指導において、教材にかかわらせるための発問や、考え方の方向を指し示す助言により、授業の深まりが異なってくる。そこで、指導案に「発問・助言」「児童の反応」や「高まった反応」を明記し、発問・助言の質を高めていくことを目指している。特に、「典型の学習」を基盤にしながら児童の意識が連続していく発問・助言を進めている。

視点３　言語活動を充実させるための学習指導の工夫

１　適切な言語活動の選定

書く力や読む力など培う力を育み、より高めるためには学んだことを生かせる学習活動を位置づけることが大切である。この学習活動を言語活動と捉え、教材とのつながりをふまえながら単元を貫くよう位置付けていく。培う力に適切な言語活動がなされるよう、どのような内容、活動が子どもの力を高めていくのかを重視していく。

２　言語活動と教材を効果的に関連付ける単元展開、学習指導過程の構想

児童の意識の中に第三次での活動のイメージをもたせるよう、第一次、第二次の学習内容を計画する。

第一次では興味関心を高め、見通しをもたせる工夫、第二次では言語活動を常に意識しながら目的をもって読むための工夫、第三次では第二次までに身につけた力を使って自力で言語活動に取り組むための学習指導方法を構想しようと努めている。

<table>
<tr><td>第一次
言語活動の意味付けによる意欲化、単元の見通し</td><td>第二次
教材から学ぶことの明確化
教材と言語活動との接続</td><td rowspan="2">第三次
様々な文章を読む
教科等での活用
日常への活用</td></tr>
<tr><td colspan="2">単元を貫く言語活動の展開</td></tr>
</table>

３　相互評価を通して言語活動への見通しをもたせ、充実を図る工夫

他者との相互評価を通して自分の状況を見つめ、考えや意見の良さをとらえることで、新たな視点で考えをまとめなおしたり自分の考えを広げたりし、達成感の高まりへとつながる。友だちから、言語活動での工夫や教材の読み取りの深さなどを学び合う活動を組み込んだ授業を進めていく。

視点４　国語科学習を補充する基盤づくり

１　読みへの意欲を高める交流活動

国語科の学習での言語活動の作品を掲示紹介したり学習成果を発表したりする場を設け、互いに感想や意見を交流することを通して、読みへの意欲を高める取組みを行っている。

２　学校図書館、町立明徳会図書館の活用

児童が自主的に活用しやすいように、２つの図書室を「調べ学習ゾーン」と「つどいゾーン」に分け学習活動を充実させたり、読書に親しんだりすることのできる空間として、図書館の環境整備を行う。

また、調べ学習や図書資料の取り寄せ等、身近な地域の図書館の活用を進めていく。

３　家庭読書の充実と啓発

読書活動を効果的に推進するために、読書の大切さや親子読書を呼びかけるプリントを配布し、家庭における親子読書の啓発を行う。

６　実践内容　物語が強く語りかけてきたことを考えながら読もう―６年「ばらの谷」

視点１　培う力を明確にする教材研究

１　培う力を明らかにするための手順（教材のねうち、学習指導要領・年間指導計画）

（１）教材のねうち

教材「ばらの谷」は、主人公ドラガンがばらにふさわしい色を求め続ける職人の姿を描いた物語である。主人公ドラガンと村人の見方の対比的な表現から、児童は様々な色のばら作りに苦悩するドラガンの心情に迫ることができる。そして、このドラガンの生き方から、職人として仕事に真摯に向かう姿や人間の力が及ばない自然本来の美しさがあること、そして、追い求めているものは身近にあり見落としているかもしれないことなど、豊かな感じ方や考え方ができる教材と考える。

第二次第３時の学習指導では、山場の「青の中に、あわいピンクの点がうかび上がって」いるのを見たときのドラガンの言動がこれまでとは大きく変化していることからドラガンの心情を考えさせていく。「これが、ばらの花なのか･･･。」の一文から、ばらの自然本来の美しさに気付くドラガンの心情に触れたり、「これまで、わたしは、いったい何をしてきたのだろう･･･。」から、職人としての生き方に目を向けたりすることもできるであろう。また、児童に気付かせたい優れた叙述である「あきることなくばらを見た後」「ほうっとため息をつきました」等からも多様な感じ方がうまれ、自分の生活や経験を重ね合わせ、これからの生き方について考えていくと思われる。

本教材から感じたことは、「職人」と呼ばれる人の考え方や生き方を描いた「桃花片」などの作品に触れていくきっかけになると考える。

（２）学年の系統をふまえた指導事項の明確化

学習指導要領の指導事項及び教材のねうちを踏まえ、各学年では単元名と指導事項を軸に設定した年間指導計画を作成し、学習指導要領と教材を照らし合わせて培うべき力の偏りや欠落がないよう確認している。ここから、培う力を育むうえにおいて適切な言語活動の選定へとつないでいく。

指導案には、前学年と次学年の指導事項の系統を明記し、「何の力が培われているのか」を把握し、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習することを踏まえて指導を進めている

教材「ばらの谷」での系統は次のとおりである。５年の「世界でいちばんやかましい音」「注文の多い料理店」を受けて、６年「ばらの谷」では、物語の構成や人物の変容や題名などを手がかりに物語が自分に強く語りかけてきたことについての自分の考えをまとめることを学習する。そして、６年「海のいのち」の学習へと発展することとなる。

指導事項Ｃ　エ　登場人物の相互関係や心情・場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる力

⇩

５年６月 「世界でいちばんやかましい音」 物語の基本的な構成を知り、物語全体の中で「何」が変わり、その根拠は何なのかを読み取る。その際、優れた叙述にも着目する。	５年１０月 「注文の多い料理店」 物語の構成をとらえたり、場面展開に即した優れた叙述について話し合ったりして、物語のおもしろさを味わう。	６年６月 「ばらの谷」 物語の構成や人物の変容、題名などを手がかりに物語が強く語りかけてきたことについて優れた叙述を見つけながら自分の考えをまとめる。	６年１０月 「海のいのち」 物語の登場人物の相互関係や暗示的に示された事柄に着目しながら、人物の心情を読み取り、物語が強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめる。

2　意欲を高め、継続して追求する適切な学習課題の設定と提示

培う力を育むための言語活動に向かい、子どもにとって意義のある、「人に知らせたい、読んでもらいたいという相手意識をもてるもの」「自分の力の伸びを実感できるもの」などやりがいを感じることのできる学習課題を設定している。

教材「ばらの谷」では、指導事項Ｃエ「登場人物の相互関係や心情・場面についての描写をとらえ、優れた叙述についての自分の考えをまとめること」から「物語が強く語りかけてきたことをまとめる力」を養うため、主人公の生き方や考え方に興味をもって教材文を読み、さらに他の物語も読み進めようとする意欲を高め、主体的に言語活動に向かう学習課題を考え設定した。

（考えられる学習課題）

○　作者が伝えたかったことを紹介すること

○　物語が語りかけてきたことを紹介すること

○　一番心に残ったことを紹介すること

本実践では、児童の実態に合わせた言葉を使って「心に強く感じたことを新聞で伝えよう」とした。

3　言語活動を通して培う力が育っているかを見極める評価の在り方

培う力が育まれているのかの評価を行い、学習指導過程を組み直したり、新たな視点を気付かせるための発問や助言を工夫をしたりするなど、今後の学習指導の改善に生かしていく。単元のどこで、どんな方法で、どんな観点の評価を行えば、指導法の改善となるのかを明らかにする。

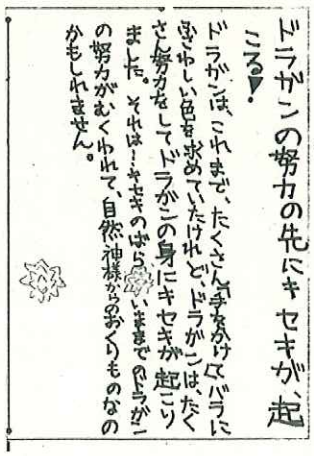
教材「ばらの谷」では、単元の評価規準を下記のように設け、学習を進めた。

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
エ　場面の構成をとらえ、中心となる人物の変容や情景の変化などを手がかりにして、物語が自分に強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめる言語活動の指導		
・物語の大きな変化に気付いて、自分の考えをまとめ、それを広げたり深めたりしようとしている。	・登場人物の心情や場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめている。	・語感、言葉の使い方に対する感覚などについて意識して文章を読んでいる。

○　評価の実際 - 指導事例１　（第二次第３時の学習指導）

・　本時の目標

青いばらの中に咲く一輪の小さなピンク色のばらを見つけたときのドラガンについて、今までの言動と比べることで、ピンク色のばらへの思いが大きく変容していることに気づくとともに、「努力を続けることの大切さ」「自然のもつ力のすばらしさ」などドラガンの変容を通して感じたり考えたりしたことを新聞の１つのコーナーに表現することができる。


ドラガンの努力の先にキセキが起こる！

ドラガンは、これまで、たくさん手をかけてバラにふさわしい色を求めていたけれど、ドラガンは、たくさん努力をしてドラガンの身にキセキが起こりました。それは、キセキのばら。いままでのドラガンの努力がむくわれて、自然、神様からのおくりものなのかもしれません。

・　評価規準　（【読】ノート・発言・表現物）

評価Ｂ　「山場での登場人物の心情や行動等の大きな変化から、感じたことや考えたことを自分の言葉で新聞にまとめている」

ドラガンの努力の先にキセキが起こる！

いままでのドラガンの努力がむくわれて、自然、神様からのおくりものなのかもしれません。

本児童は、ばらにふさわしい色を求めて努力を続けてきたドラガンの姿から「ドラガンの努力の先にキセキが起こる！」と見出しを書き、感じたことや考えたことを表現した。この表現をＢ評価とした。

評価Ａは「山場での登場人物の心情や行動等の大きな変化から感じたことや考えたことを自分の経験と結びつけながら、自分の言葉でまとめている」と設定した。結果としてＡ評価の児童はいなかった。教師の経験を語ったり、具体的な児童の体験を語らせたりする中で、ドラガンと自分を重ね合わせられるよう支援する必要があった。

本児童は、ドラガンの努力に視点を当て、ドラガンの生き方を参考にしたいとまとめたが、具体的に今までの自分の経験とつないで考えを深められていない。この表現ではＡ評価にはならないと判断し、Ｂ評価とした。

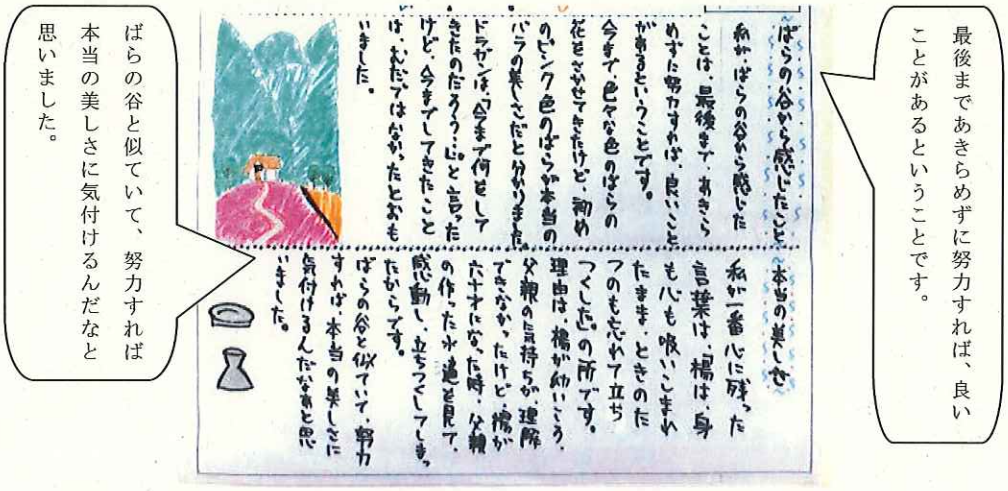
○　指導事例２　（第三次第１時の学習指導　「桃花片」を読んだ後の表現）

・　本時の目標

揚が桃花片の水差しと出合った山場の場面を読み、桃花片の作品が自分に強く語りかけてきたことを考え、楊の考え方や生き方を自分と比べながらまとめることができる。

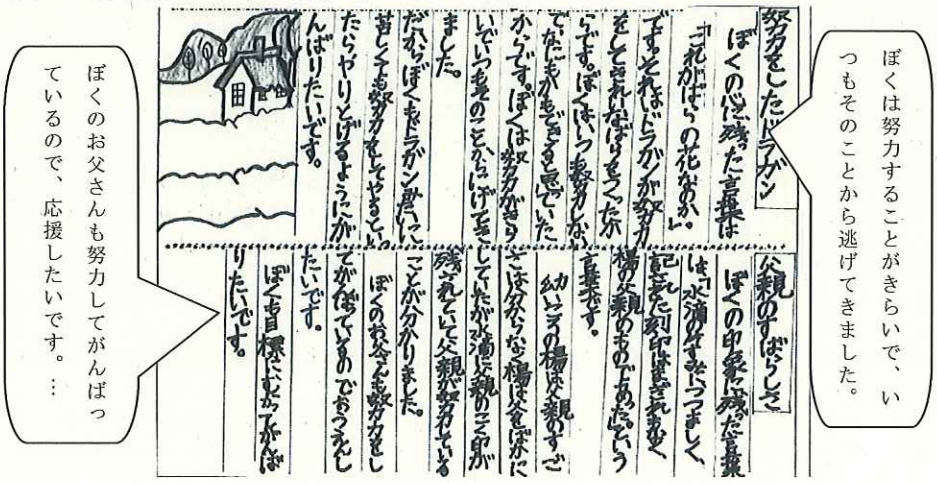
・　評価規準（【読】ノート・発言・表現物）

評価Ｂ「読み取ったことを自分の言葉でまとめ、構成を整えながら新聞に書き表している」



本児童は、ドラガンと楊に共通している職人の生きざまに気付き、努力の大切さについてまとめている。この表現をＢ評価とした。

評価Ａは、「作品からメッセージを読み取り、読み取ったことを自分の経験とつないで構成を整えながら書き表している」と設定した。本児童は父の姿から学んだり、自分の今までの努力を振り返ったりしたことをまとめている。

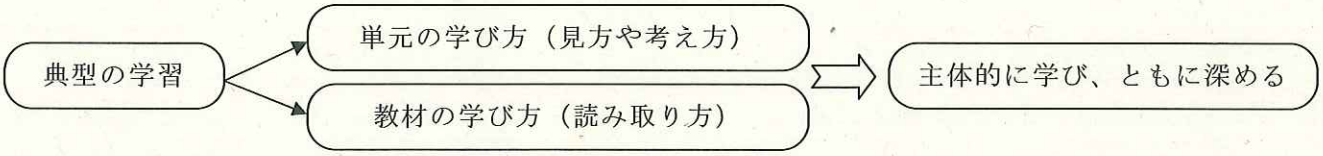


本児童は、自分が今まで努力せず生活してきたことを振り返ったり、自分の父親の姿を思い起こしたりしながら、自分の考えをまとめた。この表現をＡ評価とした。

視点２　自らの考えを友だちとかかわらせる学習指導の工夫

１　「典型の学習」から読みの「型」を学び、自らの学びへと向かうための工夫

「典型の学習」とは単元の見方や考え方や教材にかかわる方法の「典型」を学習することである。「典型の学習」を生かして、児童が主体的に教材に向かい、友だちとかかわりながら学びを深める学習指導方法を築くことを目指している。



（１）単元の学び方

単元導入時に単元を見通す学び方の「型」を学習し、この第一次の学習が「典型の学習」となる。第一次では、「かさこじぞう」など、起承転結のはっきりとした構成をもち、場面の変化が分かりやすく児童にもなじみ深い物語を教材として、「山場では場面が大きく変化する」ことを学ばせ、「変化の中に作者はどんなメッセージをこめているのか」を考える「典型の学習」を進めた。

この見方や考え方の「型」を生かして、第二次では、主人公ドラガンの行動や言葉から感じたことや考えたことを表現させた。第三次では、「ばらの谷」と結び付く「桃花片」の作品に出合わせた。

第一次「典型の学習」	⇨ 第二次	⇨ 第三次
山場での変化に目をつけると、作者が伝えたかったことを読み取れることを学ぶ。　「かさこじぞう」「であえてほんとうによかった」	「ばらの谷」を読み、作者が伝えたかったことを読み取る。	「桃花片」を読み、作者が伝えたかったことを読み取る。 山場の変化を見付けながら他の物語文を読む
単元を貫く言語活動「○○新聞づくり」のポイントと関連した指導 ⟶ 「山場の大きな変化を見つける」「強く心の残る言葉を挙げる」「考えたことや感じたことをまとめる」		

（２）教材の学び方

「典型の学習」を授業の前半や１時間(45分)に位置付け、「どのような記述の工夫があるのか」「主人公の気持ちをどう表現しているのか」等の教材の読み取り方の「型」を学び、それを生かして主体的な学習へと展開していく。

〈授業前半部分を「典型の学習」とした指導〉

第二次（第２時）			
授業前半（典型の学習）	授業後半		
ピンク色のばら	白色のばら	黄色のばら	青い色のばら、ピンク色のばら
村人、ドラガンの心情を読み取る学び方	→	→	→

「ばらの谷」の第二次の第１時で場面構成の指導を行い、第２時の学習の前半部分で「ピンク色のばら」の学習を一斉指導で行い、ばらへの村人とドラガンの心情が分かる言葉を短く書き出しながら変化をまとめていく「典型の学習」を行った。後半部分では、この学び方を生かして、白色・黄色・青いばらにおける登場人物の心情を自分で読み進めた。

〈４５分の学習を「典型の学習」とした指導〉

第二次		
第１時（典型の学習）	第２時	
人間と虫を比較した書きぶりを「カミキリムシ」から読み取る。	授業前半 第１時を生かし「ケラ」を読み取る	授業後半 自力で「カマキリ」「チョウ」を読み取る

また、４５分の学習指導を「典型の学習」と位置付け、それを生かして次時以降へとつなげる学習展開も進めている。２年生「虫は道具をもっている」では、「カミキリムシ」から表現の特色を学び、それを次時の学習に生かして児童が主体的にほかの虫の表現の特色を学んだ。

２　考えを深め、人とのかかわりを深める板書構造の工夫

板書は「ともに」学ぶための道具である。ここには、「典型の学習」に関わる内容や教材の見方や考え方、表現の特徴、さらには、友だちの考え方や感じ方が構造的にまとめられていることが「ともに学び合う」ために不可欠である。学び合いを深めるために比較や関係付けの思考を助けたり促したりする板書構造を「型」として取り組んでいる。

「ばらの谷」の学習では、「典型の学習」に関わる板書内容として、「山場の大きく変化したところを見つけること」や「言葉から感じたことをまとめること」等の学習のポイントを掲示した。また、登場人物の心情変化を時系列に沿って比べることで、主人公のばらや焼き物に対する思いの深さや違いの変化に気づくと考え、主人公ドラガンと村人の考えを上下に対比して示した。

「ばらの谷」、「桃花片」ともに、登場人物の考えや思いが明確になるよう、上・下に区切り、板書にまとめた。

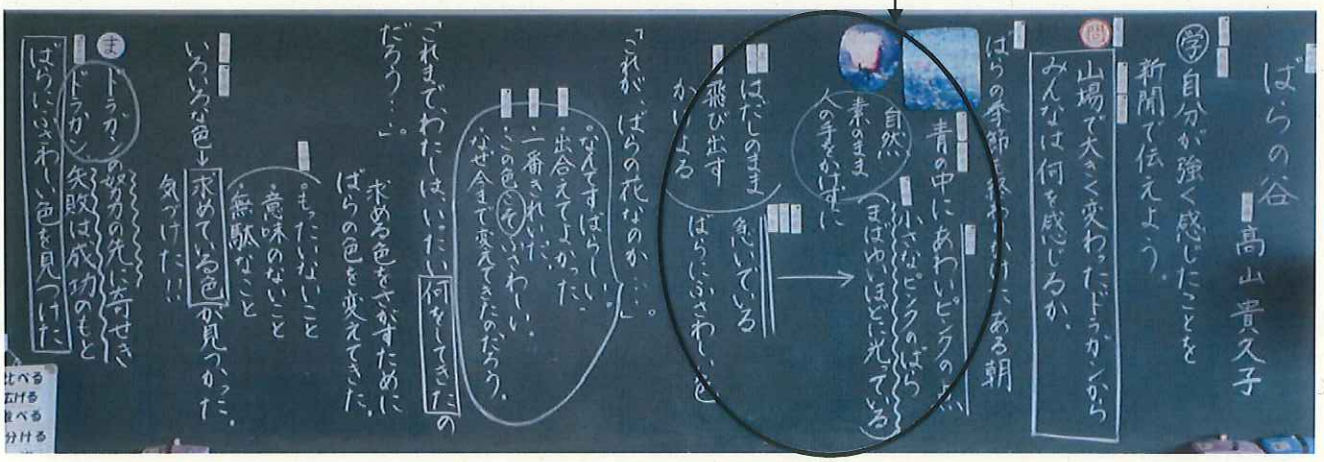
【「ばらの谷」　ドラガンと村人の考えを対比】

【「桃花片」　楊と父親の考えを対比】

時系列でドラガンと村人の考えを対比的に板書した。
ばらの色を追求してきたドラガンの生き方を振り返らせることで、ばらにふさわしい色に出合えたドラガンのこれまでの努力に目を向ける児童が増えた。

前時の板書を提示し、ドラガンや楊の思いを振り返れるようにした。
ピンクのばらの花に対して、ドラガンがはじめに「うす気味悪い人にこびる色」と考えていたことを思い起こさせることで、はだしのままピンクのばらにかけよったときのドラガンの大きな心情変化が明確になった。
また、楊の焼き物に対する思いの変化を理解させるために「幼い楊」「若者の楊」「父の死後」の思いを時系列で板書に示した。楊の焼き物に対する思いをもう一度確認させることで、楊がいい焼き物を求めて努力を重ねてきたからこそ、父の思いに触れ、焼き物の本当の美しさを理解できたことに気付くことができた。

【「ばらの谷」の本時の板書】



３　教材にかかわらせる発問、考え方の方向を示す助言の工夫

見方や考え方を高めていく学習指導において、教材にかかわらせるための発問や、考え方の方向を指し示す助言により、授業の深まりが異なってくる。そこで、指導案に「発問・助言」、「児童の反応」「高まった児童の反応」を明記し、発問・助言の質を高めていくことを目指している。

教材「ばらの谷」では、物語の山場での出来事や中心人物の大きな変化を見つけ、心に残った言葉から感じたことや考えたことをまとめ、作品が自分に強く語りかけてきたことを書くことをねらいとした学習を進めた。

○事例１（第二次第３時「ばらの谷」）

山場でピンクのばらを見つめるドラガンの心情を考え、これまでの努力や葛藤に気付かせる。

Ｔ　ドラガンは何をしてきたのだろう。

Ｃ　これまでいろいろな色を作ってきたのは無駄だった。

Ｔ　どんなことからそう思ったの。

Ｃ　今までの時間がもったいない。

Ｃ　でも、いろいろな色を熱心に作ってきたからこそ、求めていた色を見つけられたんだと思う。

Ｃ　何年もの間、努力を続けてきたから、ばらにふさわしい色が分かったんだ。

求めていた色が元々咲いていたピンク色だったということから、ドラガンがしてきたことを振り返らせる発問をした。無駄という発言がある一方、考えの背景を問う助言からこれまでのドラガンの努力に目を向けることや、真剣に取り組んでいたから求めていたものにたどり着いたという作者のメッセージに触れてきた。

○事例２（第三次第１時）

「桃花片」の山場で、いい焼き物を追い求めてきた楊の生き方に目を向けさせる。

Ｔ　若い頃の楊がこの水滴を見たら、同じようにしただろうか。どう思う。

Ｃ　良さには気づかなかったと思う。

Ｃ　その頃の楊は、もっといいものを求めていたから、今のようなことはしないと思う。

Ｃ　楊は、若い頃父親に反発していたから。

Ｔ　楊の考えが変わってきたのだろうか。

Ｃ　楊は６０歳で少しわかってきたんだと思う。

Ｃ　自分でやるようになって陶工の難しさがわかってきた。父の水滴をすごいと思った。

Ｃ　年がいった楊は次第に満足していなかった。心がなごむ水滴を見て感動したんだ。

父親の作品をずっと身近で見てきたはずなのに、若い頃はその良さに気づけなかった。いいものを追い求める楊の心情の変化に気づかせるため、「若い頃の楊なら。」と発問した。この発問から児童は楊の心情がどう変化しているのかを振り返り、更に「考えが変わってきたのだろうか。」と助言し、楊の思いを振り返らせた。楊の焼き物に対する真剣な思いや積み重ねてきた努力がドラガンと共通していることに気付いた児童も見られ、職人の生き方への理解が深まった。

視点３　言語活動を充実させるための学習指導の工夫

１　適切な言語活動の選定

「読むこと」では読む能力を付けさせることが大きなねらいである。このねらいを達成するためには、言語をとおして自分の思いや考えを分かりやすく伝え合う学習活動により、考えを高めていくことが重要である。この学習活動を言語活動と捉え、教材とのつながりをふまえながら書く力や読む力が高まるよう単元を貫いて位置付けていく。

どのような内容、活動が子どもの力を高めていくのかを次の３点から考え、適切な言語活動かを判断し選定する。その際、子どもの高まった姿をイメージしたり、子どものつまずきを把握したりするために教師が表現物を試作する。

教材「ばらの谷」の実践で、優れた叙述について自分の考えを表現することのできる言語活動とはどのようなものかを考えた。

1培う力	2教材研究	3子どもの姿
C読むことエ 「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」	①教材文「ばらの谷」の研究 教材のねうち ②言語活動の分析 言語活動の特徴、よさ	①児童の実態把握 既習の学習内容 学習状況調査等からみえる課題 ②主体的に取り組むための手立て（相手意識、目的意識）

学習指導要領では言語活動例として

（読むこと）

・伝記を読み、自分の生き方について考えること。

・自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。

・編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。

・本を読んで推薦の文章を書くこと。

が挙げられている。

本例を参考に「ばらの谷」「桃花片」を読み、それらの物語の優れた叙述から、「あきらめずに努力すれば夢は叶う」「人間の手の加わらない自然本来の美しさ」という物語が強く語りかけてきたことを自分の生活や経験と重ね合わせ、自分なりに感じたことや考えたことを表現する言語活動を考えた。

また、本単元では、新聞作りが自分の考えをまとめるのに適切であると考えた。新聞はそれぞれの記事に分けることができるので、「ばらの谷」「桃花片」と分けて書くことができ、次にどの記事を書くのか見通しをもって意欲を高めながら取り組めると考えた。さらに見出しを工夫できるよさがある。見出しには子どもの感じ方が表れ、見出しを考える過程では自分の伝えたい結論を端的に表そうとする抽象化の思考が行われる。以上のことから本単元の言語活動を「心に強く感じたことを新聞で伝えよう」と設定した。

２　言語活動と教材を効果的に関連付ける単元展開、学習指導過程の構想

子どもの意識の中に第三次での活動のイメージをもたせるよう、第一次、第二次の学習内容を計画する。

第一次では教材や言語活動への興味関心を高め、単元の見通しをもたせる工夫、第二次では言語活動を意識しながら目的をもって教材を読むための工夫をして、さらに第三次では第二次までに身に付けた力を使って自力で言語活動に取り組むための学習指導方法を構想しようと努めている。

第一次	第二次	第三次
言語活動の意味付けによる意欲化、単元の見通し	教材から学ぶことの明確化 教材と言語活動との接続	様々な文章を読む 教科等での活用 日常への活用
単元を貫く言語活動の展開		

6年「ばらの谷」では次のような指導計画で実践した。

第一次	第二次	第三次
「かさこじぞう」「であえてほんとうによかった」など山場での大きな変化が分かりやすい本を使い、メッセージを読み取る学習をする。	第一次で学んだ学習を生かしながら「ばらの谷」で、大きな変化からメッセージを見つけ自分の考えをまとめて表現する学習を行う。	身に付けた力を生かして「桃花片」で自分の考えをまとめて表現する活動を行う。
単元を通して、様々な教材を読むことで、大きな変化を見つけ、メッセージを読み取り、それに対しての自分の考えをまとめるという読みの力を高めていく。		

(1) 第一次での工夫

本単元で設定した言語活動に向かうためには、物語文のメッセージを読み取り、心に強く感じたことをまとめるという意識を子どもが常にもつことが重要である。そこで、第一次の導入では、「山場で物語は大きく変化する」ことを改めて感じさせるために、起承転結のはっきりした構成をもち、山場での変化が分かりやすく、子どもたちにもなじみのある「かさこじぞう」と「であえてほんとうによかった」を用い、絵本の読み聞かせを行った。この活動から言語活動へと向かわせるために、絵本を読んでの教師自作の表現物を提示した。そうすることで「あらすじ」「心情の変化」「強く心に残ったこと」について新聞をまとめていくという学習の見通しをもたせるとともに、本単元への意欲付けを図った。

(2) 第二次での工夫

第二次では、メッセージを読み取り自分の考えをまとめるために、「変化」に着目しながら読みを進めた。まず、第1時では文章構成やどのような変化が描かれているのかをつかませた。第2時では主人公の心情変化に注目して読み、第3時では本教材の山場の場面から、強く心に残ったことを自分の言葉でまとめる学習を行った。その際、子どもと共にまとめたあらすじを掲示しておくことで、山場での変化前と後を常に振り返ることができ、大きな変化をつかむことができた。主人公の気持ちの変化が強く現れている叙述「これが、ばらの花なのか…。」「これまで、わたしは、いったい何をしてきたのだろう…。」の「…。」に続く言葉を考えたり、その叙述からどのようなことを感じたのかを発表させたりすることで、物語のメッセージに気付くことができた。

また、毎時間の終末に新聞の1つの記事を作る活動を組み込むことで、常に言語活動を意識しながら教材を読み進められるようにした。

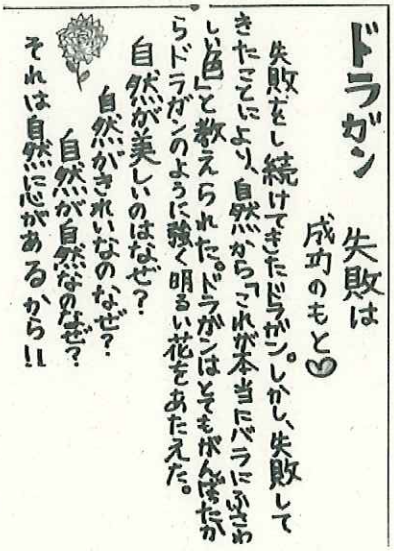
(3) 第三次での工夫

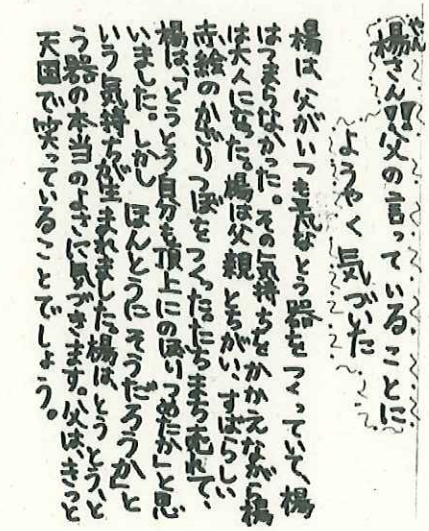
第三次では、第二次までに身に付けた力を使って様々な文章を読むことで、より読みの力を高めていくことをねらいとした。本実践では、変化が分かりやすいということ、教科書に掲載されている教材のため子どもの学習活動に生かしやすいということ、「ばらの谷」と同じような職人の物語であるた

めに比較して読み取ることができるということから「桃花片」を選び、メッセージを読み取り、強く心に残ったことを新聞にまとめる学習を行った。第二次の学習が第三次につながるように、新聞作りのポイントをまとめて掲示したり、第二次と同様の板書構造であらすじをまとめたりするなど、自力解決の手助けになる工夫を行った。第二次と同様に読みを進めていくことで、二次から三次へと移っても「変化」に注目するとメッセージが見つかるという子どもの意識の流れは続いていた。「大きな変化に注目すれば物語のメッセージを見つけることができると分かりました。」と日常につながる感想を書いていた子どももいた。また「桃花片」と「ばらの谷」に込められたメッセージを比べる中で、「職人としてひたむきに努力するからこそ見えてくるものがある」ということや、「価値あるものや大切なものは意外に身近にあるものだ」という共通するメッセージに気付くことができた。

【活動の実際】

＜第一次で教師の作成したモデル＞　＜第二次、三次では読み取った内容を自力で新聞にまとめる＞





3　相互評価を通して言語活動への見通しをもたせ、充実を図る工夫

友だちと言語活動での工夫や教材の読み取りの深さなどを学び合う活動を組み込む授業を進める。この他者との相互評価から子どもは自分の言語活動への取組状況を見つめ、自分や友だちの考えや意見の「よさ」をとらえ、新たな視点で考えをまとめ直したり自分の考えを広げたりしていく。

教材「ばらの谷」では、第三次で心に残った言葉から自分の考えをまとめた後、心に残った言葉が同じ友だち同士が集まり互いに考えを述べ合い、アドバイスをし合う場を設定した。教師は「父親のことでアドバイスができるかな。」「努力のことではどうだろう。」「焼き物のことで意見の交換ができるかもしれないね。」と、交流の視点を子どもに与えたことによって、子どもは交流の見通しや意欲をもった。この後、友だちからのアドバイスを参考にして自分の考えを高めたり、友だちの読みのよさを取り入れたりして、自分の新聞記事を書くことにつなげていくことができた子どももいた。

考えを持ち寄り交流する

視点４　国語科教育を補充する基盤づくり

１　読みへの意欲を高める交流活動

言語活動の作品等を同学年や異学年の児童に紹介し、読書の世界を広げたり、読みへの意欲を高めたりする交流を継続的に行っている。

６年教材「ばらの谷」では、物語の大きな変化からのメッセージや、第三次「桃花片」の読みから自分の感じたことや考えたことをまとめた「新聞」を掲示し他学年の児童に紹介した。

４年教材「走れ」では、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化について読み取ったことを生かして、新たな本を登場人物の気持ちの変化について読み取りまとめた「変身ボックス」を掲示した。「変身ボックス」の面を変えて「変身」させながら作品や展示されている本を読む児童の姿が見られた。

その他、授業で培った力を披露する場として、全校生が集う野外ステージ「きらきらステージ」を設けている。ここでは、自作の詩の朗読やペープサート劇等、児童が学習したことを発表し、互いに感想や意見を交流して表現する力や発表意欲を高めている。

６年の「ばらの谷」の「新聞」

「変身ボックス」を見ている児童

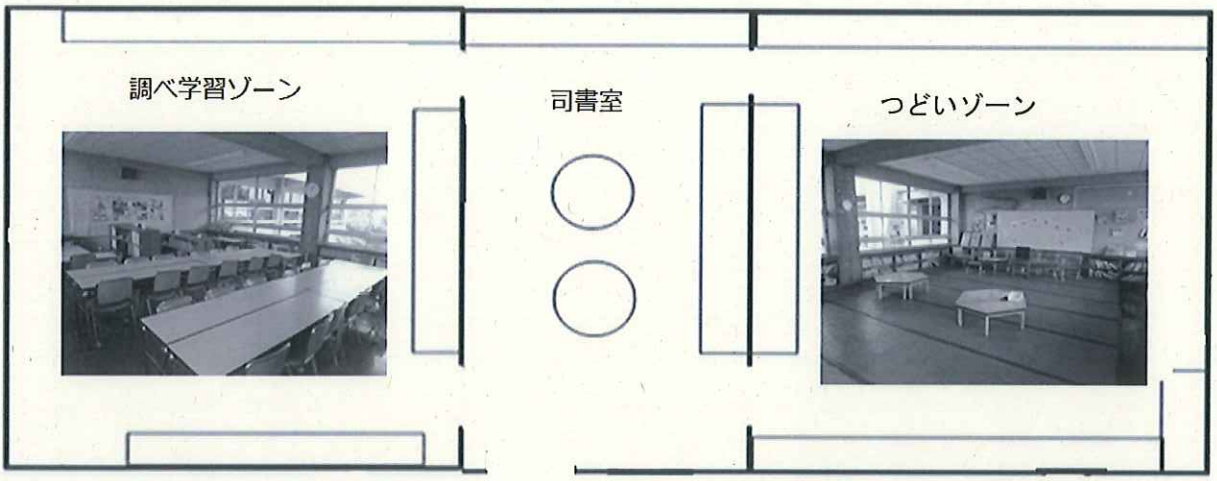
２　学校図書館、町立明徳会図書館の活用

（１）２つの図書室の活用

本校図書室は中央の司書室をはさんで２つの図書室がある。机のある部屋を「調べ学習ゾーン」、畳の部屋を「つどいゾーン」としている。

「調べ学習ゾーン」では、教科学習等に活用しやすいよう関連内容をまとめた配架にし、児童が自主的に調べる時、関係する本がすぐに見つかるよう工夫している。「つどいゾーン」は、広い畳のスペースを活用し、言語に関するゲームを楽しんだり、畳に座ってくつろいで本を読んだりできるようにしている。異学年交流の時間には、このゾーンで一緒に一冊の本を読んだり、上級生が下級生に紙芝居を読み聞かせたりしている。今後、児童がより本に親しめるように、展示型の書架の配置に改善していく。

異学年でのふれあい読書



（2）身近な地域の町立明徳会図書館

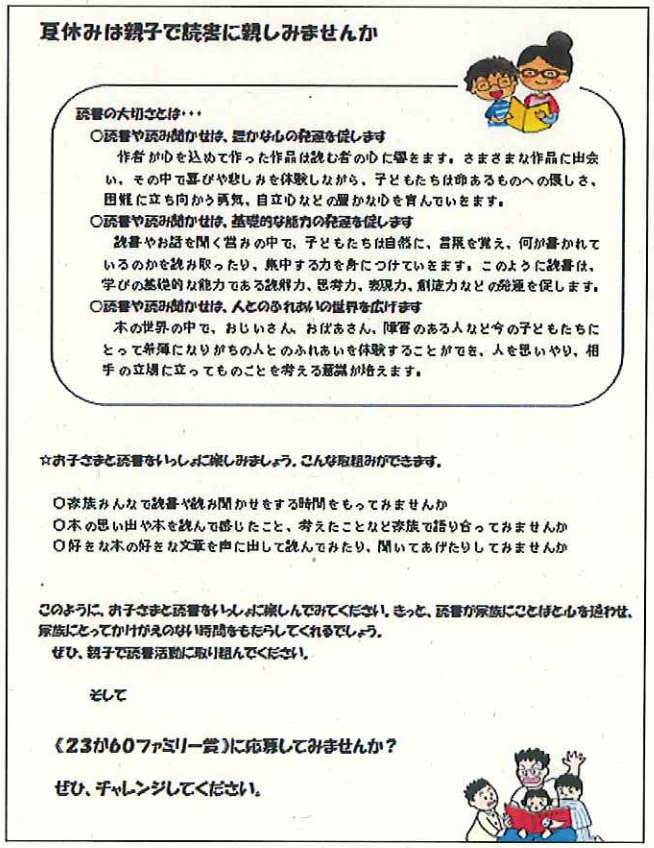
本校の運動場に隣接している町立明徳会図書館は多種な蔵書があり、町内の歴史、文化・伝統等について記述された書籍・資料等も充実している。また、県内の図書館とのネットワークにより、調べ学習や並行読書等に必要な書籍を取り寄せることができる。

また、児童が成長しても常に地域の図書館を活用する意識を持たせるため、図書利用カードの作成を保護者に呼びかけ、全児童がカードを所持している。

司書の方に本の場所を聞く児童

3　家庭読書の充実と啓発

読書活動は、家庭・地域との連携によってより効果的に推進される。学校だけでなく家庭へも読書活動が広がってほしいという願いを込めて、読書の大切さや家庭読書の取り組み方等を知らせるプリントを配布し、家庭における親子読書の啓発を行った。夏休みに県の子ども読書活動の「ファミリーでの読書活動の募集」や「読書レビュー（本の感想）の募集」に参加してもらうよう「家庭読書」への協力を呼びかけた。「読書レビュー」は、夏休み後に掲示し、全校に紹介する計画である。


夏休みは親子で読書に親しみませんか

読書の大切さとは・・・

○読書や読み聞かせは、豊かな心の発達を促します

作者が心を込めて作った作品は読む者の心に響きます。さまざまな作品に出会い、その中で喜びや悲しみを体験しながら、子どもたちは命あるものへの優しさ、困難に立ち向かう勇気、自立心などの豊かな心を育んでいます。

○読書や読み聞かせは、基礎的な能力の発達を促します

読書やお話を聞く営みの中で、子どもたちは自然に、言葉を覚え、何が書かれているのかを読み取ったり、集中する力を身につけています。このように読書は、学びの基礎的な能力である読解力、思考力、表現力、創造力などの発達を促します。

○読書や読み聞かせは、人とのふれあいの世界を広げます

本の世界の中で、おじいさん、おばあさん、障害のある人など今の子どもたちにとって身近になりがちの人とのふれあいを体験することができ、人を思いやり、相手の立場に立ってものごとを考える感性が培えます。

☆お子さまと読書をいっしょに楽しみましょう。こんな取組みができます。

○家族みんなで読書や読み聞かせをする時間をもってみませんか
○本の思い出や本を読んで感じたこと、考えたことなど家族で語り合ってみませんか
○好きな本の好きな文章を声に出して読んでみたり、聞いてあげたりしてみませんか

このように、お子さまと読書をいっしょに楽しんでみてください。きっと、読書が家族にことばと心を通わせ、家族にとってかけがえのない時間をもたらしてくれるでしょう。

ぜひ、親子で読書活動に取り組んでください。

そして

《23が60ファミリー賞》に応募してみませんか？

ぜひ、チャレンジしてください。

夏季休業前に配布した啓発資料